

医者に言いにくい患者の声、医学生が聞きます

診察や医学教育に患者の声を取り入れるため、京都や滋賀、大阪の医学生が医師に対する望みを患者から聞き取る試みを行う。「先生」と呼ぶ医師に本音を語れない患者は多く、将来的には治療ガイドラインにも反映させたいという。全国的にも珍しい取り組みで、学生は「医学生だからこそできる、患者と医師をつなぐ役割を果たしたい」と意気込んでいる。

計画しているのは、大阪医科大5年の莊子万能さん(23)と橋本里穂さん(23)、滋賀医科大6年西明博さん(31)と京都大医学部5年石橋茉実さん(23)。慢性疾患で治療法が多く、生活上の負担も大きいリウマチを選んだ。



患者への聞き取りを前に話し合いを重ねてきた莊子さん(左から2人目)ら医学生＝京都市下京区

「日本リウマチ友の会」(東京都)の協力を得て、患者計6～9人をグループごとに分け、90分間で聞き取る。質問項目は細かく決めず、診療に抱く疑問や不満、普段は医師に意思表示できないことを、対話の中で引き出すよう努める。日本リウマチ学会による患者対象の調査で上がった「主治医が目を見て話してくれない」「検査値だけの話題しかない」といった声を反映させた。

医学部は5～6年で臨床実習を行う。西さんは「実習では患者から『先生』と呼ばれる。一方、がん患者サロンでは医師への不満を聞く」と振り返る。莊子さんも「患者も学生には気軽に話せることがあるかもしれない。医学生の立場を医療に生かしたい」と語る。

4日に京都市内で聞き取り、結果を10日に東京大である日本ヘルスコミュニケーション学会で発表する予定。莊子さんらに助言している京大医学研究科の中山健夫教授は「患者の生活や価値観を深く尋ねることは、学生の教育としても大きな意味を持つはず」と期待する。

【2016年09月02日 17時00分】

Copyright (c) 1996-2016 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd. All rights reserved.

各ページの記事・写真は転用を禁じます。著作権は京都新聞社ならびに一部共同通信社に帰属します

[ネットワーク上の著作権について](#) [新聞・通信社が発信する情報をご利用の皆様](#)に(日本新聞協会)

[電子メディアおよび関連事業における個人情報の取り扱いについて](#)